

小泉八雲の「十六ざくら」について

越 智 良 二
(国文学研究室)

木に乗り移り立ち所に花を開かせた。雪降る一月十六日のことであつた。以来、桜は毎年同じ日に咲くのである。

小泉八雲の短篇「十六ざくら」(Jiu-Roku-Zakura)は、「乳母ざくら」(Ubazakura)と共に単行本『怪談』(KWAIJAN)^{註1}に収められたもので、その概略は以下に示す通りである。

伊予の国和氣郡に十六ざくらと呼ばれる古い桜樹がある。毎年陰曆正月十六日に一日だけ花を開く。この木の中には或る人間の靈魂が宿っている。昔年老いた武士があつた。子供達に先立たれ、今はこの庭の桜樹に数々の思い出を結んで生き甲斐としていた。ところが、或る年の夏、この桜は萎れて枯れてしまった。老人は酷く悲しんだ。親切な隣人達が代りに美しい桜の若木を植えてくれたが、悲しみは消えなかつた。或る日、老人は、桜を生き返らせる方法を思いついた。それは、古い桜の身代りとなつて自分の生命を差し出すことであつた。樹下に白布を敷き作法通り老人は切腹した。老人の靈魂は、

これは、八雲の多くの作品がそうであるように、日本の伝説を材源とし彼の筆によって作品化されたものであるが、直接に彼が参考にしたものは『文藝俱樂部』第七卷第三号に掲載された「諸国奇談」(愛媛淡水生)の記述である。

伊予国温泉郡山越村竜穩寺の境内に十六日桜と言ふ一つの桜樹あり、毎年陰曆正月十六日には氣候の寒暖にかゝらず蕾を結び必ず其日に花を開く、又此桜の一名を節会桜とも言ひて舒明天皇道後温泉に御幸遊ばれしときも此桜を觀覽あらせ給ひしと聞く、冷泉院為村卿の歌にも『初春のはつ花桜めづらしく都の梅の盛とも見る』と詠れしとかや、今桜の由来を尋るに往昔此里に花を愛する翁ありしが、或年の正月十六日此樹下にたゞみて吾が齡己に八旬に余りたれば、又花咲く春に逢ふこともあるらんかと独言せしに不思議や桜

樹忽ち二三の蕾綻びたれば、翁の喜び言はんかたなく見る人皆涙を催しける、実に草木さえも心ありて其情に感ぜしならん、夫より今に至る迄日を違えず蕾を結び花咲くと言ふ、此日は遠近の文人墨客樹下に会して終日花を愛し榮を尽して帰る、諸君も道後温泉に入浴の際には一度杖を曳き賜え何でも道後よりは二十町に不足そうな。

この観光案内めいた文章は、勿論土地の古伝説を写したものが、今日松山地方に伝わる「十六日桜」にまつわる伝説には、大きく区分すれば二系統ある。それは、この『文藝俱樂部』に採録された、老人の独語に感応する桜樹の話と、養老伝説にも似た孝子桜の伝説である。現実の松山地方においては、寧ろ、後者の方が優勢なのだが、今、それを『櫻溪志』所収の名月上人撰「十六日櫻記」によってみると、以下の如きものである。

野史載、上古有純孝者、和氣郡山越村人也、父老且病、曰吾憾先櫻溪之花休乎、子聞之輒行櫻溪、迎望無花繞樹三匝、忽然視花、折而還、父看而嘆曰櫻溪之花也、吾願盈矣、明日物故云、鄉人拳靡不嘆其孝感者時適正月十六日也、

明月上人（一七九七年没、七十一才）は松山円光寺の僧、「扶桑樹伝」の著者である。『櫻溪志』は、安永八年（一七七九年）正月八日に明月上人以下の門人達が花見に行った折の詩賦を集めたものである。此処に記載されたものは、明らかに、『文藝俱樂部』に採録されたものとは別のものである。

一方、『文藝俱樂部』に採録された説話と酷似するのは、宇松茂才（宇佐美長松字は茂才、三津及び松山で町奉行を勤めた人物）執筆の「続十

六日櫻記」の方である。此処には、孝子は登場せず、唯の時節外れの初桜が咲いたという単純な内容になっている。以下に其れを示す。

野史所伝、上古有愛此花翁、老且羸矣、乃以正月十六日、彷徨樹下、慨然而嘆曰、甚矣吾衰也久矣、旧溪芳辰可復值乎、潜然淚下、斯須頃、南枝著花者数四、爾来雖沿節候之進退多少不均、必至此日莫不有花云、

この説は、明月の『櫻溪志』序にも「宇茂才有異聞」として其の文章を登載しているから、その内容の単純さから言っても孝子桜系説話に先行するものに違いない。

以下、この『櫻溪志』所載の二説を継承したものに、野田長裕（石陽と号す、一八二七年没、五十二才）の『伊予古蹟志』が認められる。

其伝曰昔有一老、愛斯花其及耄老、一日倚杖彷徨樹下、齋咨涕淚而曰、今既台背、死在旦夕、必先于花候、嗚呼可歎哉、時正月十六日也、須臾櫻花燦爛而開焉、自是遂不愆其期

因に、この書は、石陽の祖父思齋が明和二年（一七六五年）藩主の命により編録を開始したが、病死により孫の長裕が享和二年（一八〇二年）改めて着手したものである。その他「十六日桜」に関する説話は、有名な神沢貞幹の『翁草』や橘南蹊の『西遊記』にも記載されており、小林一茶の紀行文等にも認められる。今日、松山市山越には、明治十一年西村清臣の建立した高さ五尺巾三尺五寸程の「十六日桜」の石碑がある。

これは、先に述べた明月上人の「十六日櫻記」の内容を粗述したものであるが、唯、其処では、孝子の名前が吉平と具体化され、その父親も明

月が「明日物故」としたところを病も完治し長生きした旨の改変が加えられている。以後松山地方にあっては、この明月上人主唱の孝子桜系説話が優勢となり、今日の教育界にあっては事情は同様である。例えば、昭和六年発行の『郷土読本』上巻（愛媛県師範学校附属小学校）所収の「十六日櫻」（五十嵐力）には次のようにある。

温泉郡伊臺村大字山越の龍穩寺といふ古寺の境内に、十六日櫻といふ名木がある。毎年正月の十六日には、必ず花が開くといふ所から、此の名を得たので、長く里人の誇りとも教訓ともなつて居る。

この名木はもと櫻谷といふ所にあつたのを移したのである。昔、此の里に一人の翁があつた。臨終の際に、其の子に向つて、「俺はもう此の世に望みはない。唯だ此の春の櫻を見ずに死ぬるのが心残りだ。」と云つて嘆いた。孝心深き子は、それから庭の櫻の木の下に立つて、夜もすがら祈願をこめたが、夜が明けて見ると、昨日までの裸枝が爛漫たる花をつけてゐる。驚き喜んだのは子供で、早速父の翁に知らせると、翁も一目見て病苦を忘れ、さほどの大病も、それから一枚紙を剥ぐやうに癒えたといふ。是れが正月の十六日であつたので、それから此の木を「十六日櫻」といひ、また「孝子櫻」とも呼ぶやうになつたのである。

此のめでたき出来事であつて以来、代々の帝が温泉行幸の砌には、必ず此の地に龍駕を枉げさせられたと云ひ傳へてゐる。又、舒明天皇の行幸があつた時には、此の櫻が折悪くまだ開かなかつたので、本意なく還幸あらせられた。すると間もなく咲いたので、追かけて奏聞すると、すぐに御車を還して観覧あらせられた。其の折御車を返させられた坂を「車返し坂」といひ、又勅使が立つて御車を停められた所を「勅使橋」と稱へて居る。

更に言えば、昭和五十二年発行の『松山のむかし話―伝説』（松山市教育委員会文化教育課編）や『愛媛の伝説』（愛媛県教育研究協議会学校図書館委員会編）等にあつても、孝子桜系説話が採録されている。

恐らく、八雲が此の孝子桜系説話を目にしたとすれば、彼の「十六日くら」という作品は実現を見なかつたであろう。何故なら、この説話には道徳的纏まりがあり、彼の自由な想像力の発露を許さないからである。彼は、より単純な老人独語に感応する桜樹の伝説を知り、其処に日本的な武士道的精神のイメージを投入し、彼の文学作品を完成したのである。次節では、作品内部の構造を分析してみたい。

二

作品「十六日くら」と『文藝倶楽部』所収の材源とを比較してみると、その類似点は冒頭部分に限られている。即ち、この十六日桜という古木が伊予の国に存在し、それが季節を先取りして陰曆正月十六日に咲くという基本的な事実だけである。尤も八雲は、その所在を「伊予の国和氣郡」とだけ書いているが、材源では「温泉郡山越村龍穩寺」という風に細かく規定している。恐らく、八雲は、十六日桜を自由に想像し、表現する為には、細かな所在を故意に省略する必要もあつたのであろう。それは扱置き、八雲の作品中では登場人物も桜の性格も著しく改変されることになる。

先ず第一に、その主人公の相違である。材源にあっては、この里に住む「花を愛でる」翁であつただけ書かれているが、八雲は其れを老人ではあつても「伊予の侍」としている。これは、後に彼が桜樹の下に切腹を遂げる為には是非にも必要な前提条件であつて、以下彼は文中にお

いて何度か「侍」と呼び直されることになる。そして、更に、材源では「花を愛でる」と単純に記載された処を、八雲は具象化して

この木はその人の庭に生えていた。そして、いつもの季節に——つまり、三月の終りか、四月の初めごろ——花が咲いた。子供のころ、侍はこの木の下で遊んだ。そして、両親も、祖父も、先祖たちもずっと、百年以上にわたって季節のくるごとに、その花の咲いた枝に、花をたたえる歌を短冊に書いてつるしてきた。^註

and the tree grew in his garden; and it used to flower at the usual time, —that is to say, about the end of March or the beginning of April. He had played under that tree when he was a child; and his parents and grandparents and ancestors had hung to its blossoming branches, season after season for more than a hundred years, bright strips of colored paper in scribed with poems of praise.

と描写している。

続いて第二に、肝腎の桜の開花に就いても、材源の方は極めて単純である。即ち、老人は八十才を越えた自分の年令を思い、再び花開くであろう春に会おうことの難さを嘆き、独語するのである。桜樹は、又、その嘆きに応じて開花するのである。要するに、草木にも心ありて其の情に感じ、季節外れの花を開いたということである。一方、八雲の作品中にあつては、事情はより複雑である。即ち、或る年の夏、その桜樹は萎えて枯れてしまうのである。親切な隣人達が代りに美しい桜の若木を植えてくれたが、その老樹の代りとなることは出来なかった。そして彼は、老樹の前で切腹し、身代りとなって枯木の生命を復活させ、花を開かせ

るに到つたのである。要するに一度死んだ古木の生命を蘇生させ、その上に又開花させたということになる。

結果として、又、材源においては、桜は正月十六日に蕾をつけ忽ち開花して、多くの人々の目まで楽しませることになるが、八雲の描く桜は正月十六日其の日だけ花開くと特記されることになる。

以上のように、両者間には著しい相違があり、八雲作品は、或る意味で全く別個の物語であるとさえ考えられる。材源が、飽く迄諸国の奇談として此の十六日桜という奇木其のものを紹介しているのに対し、八雲の作品は、自ら別の主題を備えたものと言ふべきであろう。次に、それに就いて考察を進める。

八雲作品の眼目は、何といつても其の枯れた桜樹の身代りとなって武士が切腹する処にあるわけだが、この決意に到る迄の心理的事情は如何なるものであろうか。それを解く鍵は、彼の其の桜樹に対する愛着の内実を吟味することによって知られよう。先に、彼が如何に此の桜樹を愛でたか、その具体的描写に触れたが、彼の愛着は、単なる彼個人を超えて先祖伝来の血脈的背景を持つものであった。彼は単に桜を愛好したというのではなく、その桜だけに固有の愛着を持っていた。それは、親切な隣人達が植えてくれた美しい桜の若木が其の代用物とならなかつたことをみても明らかである。何故かといえば、晩年の彼の愛着は、愈年老いて子供達にも先立たれ、この世で愛するものは此の桜樹を除いて何も残っていなかったからである。

その人も、もう年老い——子供たちには先立たれた。この世で愛するものは、その木をのぞいて、なにも残っていなかった。

He himself became very old, —outliving all his children; and there was nothing in the world left for him to love except that

tree.

此処にあるのは、恐らく彼の侍としての「家」意識と呼んでもよいものであろう。本来は先祖から自分へ、そして自分から子孫へと永続し、個的存在を超えて維持されるべきものである。その彼の家系が、今、正に、彼によって絶えんとしているのであり、其の彼にとって、唯一家系を絶やさぬ方法は、先祖代々愛でた此の桜樹を蘇らせ後代に伝えることより他になかったのである。

例えば、武士の間には庭に柏樹を植え、男子を祝う端午の節句には柏餅を作る風習があった。それは、柏の新芽が出る迄古い葉の落ちないと、いう性質を愛でたのであり、その子孫繁栄を祈念した為である。武士にとっては、名門とは斯くの如き個々人の生命以上の重さを持つものであった。この十六日桜を愛でる侍にとつても、我が子に先立たれてしまった今となつては、自らの責務を果す為には、是非にも此の桜樹を復活させ後代に残すという代償行為しかなかったのである。彼は其れを「よい思いつき」と言っているが、文字通りに「身代りに立つ」ということが確信されていたのである。

此処で、彼は桜樹に対して極めて謙譲に頭を垂れ、

彼はひとりで庭へ出て、枯れた木の前に深く頭を垂れ、木にむかっていた。「どうか、お願いする、もう一度、花を咲かせてくれ——お前の身代りにわしは死ぬから」

Alone he went into his garden, and bowed down before the withered tree, and spoke to it, saying: "Now deign, I beseech you, once more to bloom, — because I am going to die in your stead."

と語り掛けている。この謙譲さは、矢張り、注目すべきものであって、人間無常の生命と自然推移の其れとを同次元のものとして考えようとする日本人的なものである。例えば、西行法師は其の有名な辞世歌に、願はくば花の下にて春死なんそのきさらぎの望月のころ

と詠んだが、此処には、桜に対する愛好は勿論、一夜の夢に似た短時間のうちに満開し、一時に散る桜の風情に重ねて自らの人生をも完遂しようとする美的願望が窺われる。即ち、美しき花を纏う桜樹と自分という人間とは決して無縁のものではなく、同じ生命を持つ同次元のものとして密かに発想されているのである。

樹木と人間の生命を同次元のものとして把握しようとする発想は、同じ『怪談』の中の「青柳の話」にも認められるが、例えばギリシャ神話等にも認められる。だが、有名な月桂樹とダフネの神話においては、人間の身体其のものが樹木に変身し、人間の悲劇や運命を象徴するものとなっている。我々の目にする泰西名画には、主人公の死を贖うべき瞬間が如実に描かれていたりする。例えば、アポロンの神の求愛を拒み続けたニンフ・ダブネーは、父なる神のペーネイオス河の畔で全身を硬直させ、足を地面にめり込ませて、手は枝となり、髪は葉となって行く。言う迄もなく、ダブネーは一本の月桂樹となったのである。この凋落を知らぬ常緑の小枝は永遠にダブネーを記念し、後に勝利者の頭上を飾る栄冠となった。それから、又、これも有名な糸杉となったキュパリススの話では、人間から樹木への変身が次のように語られている。

太陽神アポロンに寵愛された青年にキュパリススという者がい

た。彼はボーイオーティア家の息子で、屢々アポロンに誘われ野原で運動競技に興じた。彼は、又、動物好きで、美しい牡鹿を飼っていた。それは常に人々の賞讃を浴びるほどの牡鹿で、彼は其れに清らかな泉で水を飲ませたり涼しい緑の木陰で休ませたりした。或る晩春のこと、キュパリッソスは其の牡鹿を木陰に休ませた儘、アポロンと槍投げ競技を楽しんだ。その時彼の投げた槍は、大空に弧を描き遙かな木陰に落ちていった。そして、その場に休んでいた牡鹿の胸に命中した。彼は、我が手で最愛の牡鹿を殺してしまったことを嘆き、自分も死にたいと思つて身を揉んだ。駆け付けたアポロンは言葉を尽してキュパリッソスを慰めたが、その後悔を癒すことは出来なかつた。アポロンは仕方なくキュパリッソスを悲しみの木、糸杉に変えてやつた。彼の体は見る見る蒼ざめ、急に血が引いてゆくと、全身に痺れが起きて、堅い樹皮に包まれ、美しい髪は葉となつて、優雅であるが何か憂いを含んだ喬木となつた。アポロンは悲しんで「私はお前の為に泣こう。お前は他の人の為に泣き、悲しむ人達の為に仕えるがよい。」と囁いた。

という具合である。詰り、人間を記念する為に樹木が新生するのであり、飽く迄人間の方が主であり、その代償物として存在する樹木が従である。以上のようなフィジカルな変身に比べ、この十六日桜を愛する侍は、初めから彼とは別の生命体として存在する桜樹に進んで自己の生命を与え、自己の身体を消滅させて桜樹に同化をしようとしているのである。桜樹こそが主であり、侍こそが従である。自己を変形させて自己を生かすのではなく、自己を消去して他を生かすのである。

猶、念の為に此の部分の本文を引用すれば、以下の如くである。

それから木の下に、白い布と、何枚かのおおいを敷き、その上にすわり、侍の作法にしたがつて腹切りをおこなつた。それで、その人の魂は木に乗り移つて、たちまち花を咲かせた。

Then under that tree he spread a white cloth, and divers coverings, and performed *haru-kiri* after the fashion of a samurai. And the ghost of him went into the tree, and made it blossom in that same hour.

このように彼の靈魂は the ghost of him と表現され、形のない soul でもなく spirit でもない。今 ghost を英々辞典に徴してみれば、 dead person appearing to the living ということであり、半ば人型を残存させた ghost が、正に桜樹へと同化してゆくのである。こうして年老いた侍という個人は消滅するが、年月の巡りによって彼を含めた先祖伝来の家は永続するのである。恐らく、此処には、個人存在を超えて幾世紀にも亘り永生する人間の遺伝子やスペンサーの進化論哲学に対する八雲の科学的関心も伏在するであろうが、それよりも靈魂の不滅を信じる彼の詩人的情熱を見るべきであろう。

以上で作品「十六ざくら」に関する分析は尽したように思われるが、最後に二、三のことを補記しておきたい。一つは、先述の如く、八雲の描く十六日桜は陰曆正月十六日其の日だけ開花し、忽ち散花していることである。これは、老武士が老樹の身代りにたつという決意をした後即座に切腹している事実と相俟つて、極めて潔い印象を与える。そして、それは、恐らく我々日本人が春の桜を愛する重要な原因でもあつて、その散り際の見事さは、武士道的潔さと分かち難く連結されている。八雲の作品が読者に日本的な感銘を与えるのは、先述の樹木と人間とを同一次元で把握する謙虚さの上に、この潔さの付け加わっている為であり、

それは、又、同時に海外においても日本の侍に対するイメージとして固定化したものでもあろう。こうした点に就いて言えば、作品「乳母ざくら」にあって、主人の娘お露の身代りになって死んでゆく乳母お袖が、そのお露の病氣回復直後に死亡している点等も注目される。即ち、材源「乳母ざくら」(『文藝俱樂部』第七卷第八号 淡粹生)にあっては、お露の回復からお袖の死に到る迄に相当の期間があり、その間にお袖の献身的行為も人々に知られ、又お袖自身も手厚い看護を受けるといふ経緯となっている。其処のところを八雲は、お露の回復とお袖の死を直結させ、桜花の果敢無さと散り際の潔さに重ねているのである。八雲は、日本における桜花の特別な美しさを賞讃しているが、それは、矢張り、武士道的な潔さに象徴される日本人の人生観に関するものとして理解されていたようである。最後に其の事を略記し、潔く本稿を閉じたいと思う。

注

注1 『怪談』KWAIJAN (明治三十七年四月・ホートンフミリン社)

注2 引用本文は上田和夫訳『小泉八雲集』(昭和五〇年三月・新潮文庫)によった。

(一九九四年十月十一日受理)